

也、然れども白牛は未だ見聞せざる所也、本草綱目に、黃額牛は額上に一花黃なる者あり、白胸牛は黃牛にして、胸前一花白く、掌の大さなる者あり、牛中王は白牛にして頭黃なる者也、龍門牛は角の潤さ相去ること一尺、是亦牛中の王也、

〔笈埃隨筆〕長州萩府白牛山龍藏寺に、純白牛一頭あり、飼事數百年、何の故は知らずと、若其牛斃時は、必國中に一白牛を生ず、牛主則牽て此寺に獻す、

〔倭名類聚抄牛馬毛〕黃牛 宜都記云、黃牛灘、有人牽黃牛辨色立成云、阿米字之

〔箋注倭名類聚抄牛馬毛〕藝文類聚引云、自峽口、汎江百許里、至黃牛灘、南岸有重山、山頂有石壁、上有灘、名曰黃牛灘、南岸重嶺疊起、最外高崖間有石如人負刀牽牛、人黑牛黃、成就分明、既人跡所絕、莫得究焉、亦即此、

〔新撰字鏡牛〕墓黄音、阿女。

〔類聚名義抄牛〕黃牛 アメウシ アメマダラ

〔庖廚備用倭名本草首食禁〕牛ハ服藥ノ人ハ黃牛ヲ食スベカラズ、病人ハ食スベカラズ、黑牛尤食スベカラズ、凡無病人ハ常ニ嗜食ノタメニ、牛馬鷹雞ヲ食スベカラズ、病アラバ病ニ對スルヲ食スベシ、病愈後ハ食スベカラズ、

〔百練抄冷泉〕安和二年九月廿四日、黃牛入外記廳、經結政所、卽登南築垣上、東行落出去畢、可謂奇異、
〔倭名類聚抄牛馬毛〕鳥牛 辨色立成云、鳥牛楊氏漢語云、麻伊、黑牛也、

〔駿牛繪詞〕又いはく、駕以白牛、膚色光潔、形體殊好、有大筋力、行步平正、其疾如風といへり、かゝるところの白牛、はだへいさぎよく、其姿殊よく、おほきに力ありて、あゆみたひらかにたゞしく、はやき事風のごとくといへり、黑白は相對の色なり、これによりて、白牛は人間にあらざれば、黒牛を